

神戸市会 会議録

2008.03.10 : 平成 20 年予算特別委員会第 1 分科会〔20 年度予算〕(国際文化観光局等)

本文

(一部抜粋)

98 : ○分科員 (北山順一)

○分科員 (北山順一) それでは、3 点お伺いをいたしたいと思います。

まず、神戸市文化賞についてお伺いをいたします。

神戸市では、文化の発展に貢献して大きな業績を残してきた個人や団体に対して、神戸市文化賞、あるいは奨励賞、功労賞、そういうものを今まで贈呈しております。昭和 48 年から今日まで頑張ってきておられるわけでございますけれども、その今日まで授賞してきた人たちの分野を見ておきますと、かなり偏っておるのではないかなと、こういうふうに思っております。特に、芸術の部門においては、洋画や洋楽の分野の受賞者が多い一方で、全く受賞者いないという分野もあります。一口に文化と言っても多種多様なジャンルがあるわけございまして、文化の発展に貢献した方をたたえ、多様な文化を振興するという意味で、本来、この文化賞は、分野に関係なく幅広く贈呈すべきであると、こういうふうに考えております。受賞者は、選考委員会の選考によって決まるとのことです。音楽や美術の専門家が委員になっていることと思っておりますけれども、委員の分野に偏りがあるのではないのだろうか、あるいは芸術の部門では、ある特定の分野の人を評価するためには、その分野のことをよく理解している専門家が当たらなければなかなか難しいのではないかなと、こういうふうに思っております。そういう意味で、幅広く選考委員を入れていくという立場でお答えをいただきたいと思っております。

2 番目に、神戸ルミナリエについてお伺いいたします。

ルミナリエについては、現状のまま続けていくという考えのようではありますが、私は少し考え直してもらいたい、こう思っております。現状では、皆さんご存じのとおり、元町から列に並べられて警備員と警察が、もうそのまま言えばうるさく誘導していく、ただ単に歩かされていって、いつの間にか三宮に着いていくようになっております。歩いておる途中では、「皆さん立ちどまらないでください、列からはみ出さないでください、横から列に入らないでください」こういう、マイクで次々と案内をしていきます。写真を撮ろうと思って立ちどまったら「写真撮らないでください、そんなとこで」と、こういうふうに、なかなか思うように観光客として来た人たちが満足をしていくことができない状況にあります。去年も 400 万人以上の人々が神戸に来ておったと、こういうことであります。このルミナリエのそもそもの始まりは、あの震災の犠牲者の鎮魂という趣旨は大切でありますけれども、せっかくあれだけのお客さんが来るイベントなんですから、もっと神戸のまちに活力を与えていただけるようなイベントにしていかなければならない、こういうふうに私は思っております。

そこで提案を申し上げたいと思っておりますが、まず場所についてであります。今の場所が本当にいいということなのか、私はそれ以外に幾らでも場所を考えられるんじゃないか。ハーバーランドからメリケンパークを通して、あの海岸通りをずっと通って東遊園地まで行ったっていいのではないかなと、こうい

うふうに思いますし、その道中では、そういう列に入ることも出ることも自由にできるように、グルメも楽しむことができるように、ショッピングも楽しめるようにするべきだ、こういうふうには思っております。いつもそういう形で案内をされていって、「はい、どうぞ、前向いて歩いてください」って行ってあの東遊園地へ着いて、あの周りを見たら「どうぞ、こちらへ行ってください」という案内されるから、何かええのんがあるのかなと思ってついていったら三宮駅だった。「いや、こちらですよ」って行ったらバスの駐車場だったと。あの人たちは、ほんまに歩かされておるだけなんです。それで本当にいいのかなと、こういうふうには思っております。

また時期についても、12月10日ぐらいからクリスマスぐらいまではほうっておいてもいっぱい人が来るんです、いっぱい人が集まるんです。時期ももう少し考えた方がいいんじゃないかなと、私はこういうふうには思っております。

また、このルミナリエはイタリアの作品だと、こういうことでいろいろ問題があるんだと、こういうことでございますけれども、イタリアの作品以外ないのか、ほかにもいろいろあるんじゃないのか、こういうふうにも思っております。この際、発想を変えていただいたらどうかと、こういうふうには思っております。

あと1点、姉妹都市提携についてお伺いを申し上げたいと思います。

神戸市では、シアトルやマルセイユをはじめ、世界の7都市との間で姉妹都市、友好都市提携を行って、訪問団の派遣や受け入れや、あるいは音楽、芸術面などの交流事業を実施しております。けれども、なかなか一般市民から見て、その成果が見えにくいということがよく言われております。そもそもどういう目的を持って姉妹都市提携を結んできたのか、あるいはまたこれまでの交流事業で、実施してよかったと言える事例は何なのか。その結果、目的は十分達成されておると言えるのか、この点をお伺いしたいと思います。

以上、3点です。

99：○大森国際文化観光局長・観光監

○大森国際文化観光局長・観光監 私からは、神戸ルミナリエに関しましてお答えを申し上げたいと思います。

ルミナリエにつきましては、ご承知のとおり、先ほど委員からもご指摘ございましたように震災犠牲者の鎮魂と都市の復興・再生への希望を託しまして、震災の年の12月に初めて開催されまして、震災で傷つきました神戸のまちと市民に感動と勇気を与えるとともに、集客や経済面でも大きな波及効果をもたらしてこられております。13回目となりました今回、期間中400万人を超える来場者の方にお越しいただきまして、事故なく盛況のうちに終了したところでございます。

ルミナリエにつきましては、従来より、開催方法などは全般にわたりにましてさまざまなご意見をいただいております。そういった内容も踏まえまして、昨年のルミナリエ開催に当たりましては、県・市・商工会議所等、主催団体をはじめといたしまして、地元の事業者の団体やマスコミ、関連団体等で構成いたします神戸ルミナリエ組織委員会並びに実行委員会で、会場や開催時期について検討を行いました。そして、その結果でございますが、これまで多くの来場者を集め支持されてまいりましたルミナリエを今後と

も継続していくためには、現行の形が適当ではないかといった結論に達したわけでございます。

ただ、委員ご指摘のとおり、ルミナリエによりまして地域の活性化を図っていくことは、非常に重要であると私どもも認識いたしております。そして、より多くの方に神戸観光を楽しんでいただけるようにより組みを行っているところでございます。例えば、ルミナリエ・プラス1キャンペーンといたしまして、ルミナリエ期間中に市内の観光施設とか、イベント情報等を取りまとめまして、旅行会社、観光バス会社等、400社ほどに情報提供を行っているほか、臨時のバス駐車場やルミナリエ会場でもガイドマップを配布するなど、神戸に来られた方に、できるだけ会場周辺だけではなく市内を回遊していただけるように、市内観光のPRを行っているところでございます。実際的に、昼間には、北野や六甲山、そしてマリンピアなどで観光いたしまして、夜にルミナリエの方にお越しいただけるというようなバスツアーも多くございますし、各観光地ではちょうどこの時期が閑散期でございますが、ルミナリエによって観光客がふえていくといった声も聞いてございます。また、他の観光施設との連携という点でも、例えば北野坂の街路樹をイルミネーションするような神戸北野クリスマスストリートや公開異人館のライトアップなど、各地域でも、観光客をルミナリエに合わせまして、より多く呼び込むためのイベントが実施されているのではないかと考えております。

特に今回のルミナリエでは、会場で8,700万を超えるような多くの募金をいただきました。本当に多くの皆様から募金をいただき、ルミナリエが多くの方々に支持されているということを改めて実感した次第でございます。皆様方の温かいご支援によりまして、何とか単年度で黒字を確保できる見通しでございます。ちょうどことしの開催につきましては、あす、ルミナリエの組織委員会・実行委員会が開催されることになってございまして、そこで決定されることになってございます。今後とも、震災犠牲者の鎮魂はもちろんでございますが、委員ご指摘のように地域活性化の観点からも、各方面の方々の意見を聞きながら、声を聞きながら、ルミナリエを末永く続けていけるようにより組みでまいりたいと考えてございます。

ちなみに、イタリアの作品といった点でございますが、やはり本場イタリアのルミナリエ作品であることが、神戸ルミナリエがこれだけ多くの方々に支持されている理由の1つではないかと考えておりますが、今後とも、委員のご指摘の点も含めまして、さまざまなご意見を聞きながら、さらに検討を加えてまいりたいと考えてございます。

私からは以上でございます。

100：○井上国際文化観光局文化観光部長

○井上国際文化観光局文化観光部長 文化賞についてお答え申し上げます。

委員ご指摘のように3つの賞がございまして、文化賞につきましては、文化の発展に特に功績がある方、あるいは文化奨励賞につきましては、若手でこれからの将来が期待される方、文化活動功労賞については長年にわたるひたむきな努力、それに対する顕彰という意味でお贈りをいたしております。これらの賞につきましては、いずれも自薦、他薦を問わず、分野にかかわらず幅広く推薦をいただいと。そういったような中で、文学、音楽、美術といった分野から、能とか、邦楽といったような伝統文化まで、現在、文化賞で229名、文化活動功労賞で122名、奨励賞で65名といった広いジャンルの方、多くの方に授賞をいただいておりますというのが現状でございます。

選考につきましては、確かに、現在は美術、音楽、文化といった第一線で活躍されている美術家の方、あるいは評論家の方、さらには芸術・文化に造詣の深い学識経験者でありますとかマスコミ関係者、それに我々市の関係者も入った委員会で選考を行っていると。確かに委員ご指摘のように、非常に文化の領域も広いということもありますので、選考委員につきましては、そういったような広く見ていただける方をお願いをしておるわけでありまして、確かに、現在14名という選考委員で選考をしてるわけですが、ある程度やっぱり適正規模という、数においても適正規模があるのかなと思ってるんですけども、他都市と比べましても、14名という委員の数は最も多い分類に入っておりまして、これ以上ふやすというのはなかなかちょっとしんどい面があるのかなということで、我々としましては、現在の選考委員会で、より公正に、客観的に推薦いただけてるのかなと思っております。

以上でございます。

101：○上田国際文化観光局国際推進室長

○上田国際文化観光局国際推進室長 私の方から、姉妹都市の関係についてお答え申し上げます。

姉妹都市につきましては、基本的には1大陸1都市という原則のもとに、相手方の都市と地勢的に特徴が似てるかどうか、あるいは人口規模がどうか、国際貿易港があるかないかとのことを基準に、できるだけ双方お互いの都市が類似しているところを勘案しまして提携都市を選んでまいりました。また交流についても、分野を限定しない包括的な交流ということを基本にしまして、長期にわたる継続的な交流を通しまして、互いの市民間の相互理解、あるいは相互交流を促進させようという目的で、これまで7つの都市の間で提携を行ってまいりました。姉妹都市につきましては、確かに都市によって交流密度にかなり差がございますけれども、これまで文化、スポーツ、教育などさまざまな分野で交流を続けてまいりました。

特徴的な交流を幾つか申し上げますと、例えばスポーツ交流の分野では、天津市との間で小・中学生のバレーボール、あるいはバスケットボール等のスポーツ交流を平成4年から実施をしております、これまで15年近く300名の小・中学生が交流をしております。また青少年交流という分野で申しますと、シアトルの間では、高校生の相互訪問による交流を平成元年から20年間続けてきてございまして、これまで双方で数百名規模の高校生が、それぞれの都市を訪問しております。また経済交流の分野では、幾つかの都市から経済ミッションがたびたび派遣をされてございまして、私どもの方でも、シアトルと天津には経済貿易事務所というのを設置をしまして、さまざまな企業誘致活動でございまして、クルーズ船の誘致、あるいは観光プロモーションなども実施をしてきたところでございます。

ただ、委員ご指摘のとおり、交流事業の成果というのはなかなか見えにくい部分というのがあるのはそのとおりでございます。私どもとしましては、長年にわたってこうした交流事業を蓄積をする中で、相互理解とか、あるいは人のつながりというのがはぐくまれてくると、こうしたものは市民にとっても非常に貴重な財産ではないかというふうに考えてございます。特に、若い世代、青少年の相互交流というのは、これからの神戸を支えていく人たちでございまして、そうした人たちの国際理解の促進というのはやはり重要でございますけれども、それに姉妹都市交流というのは大いに役立っている面があるのではないかと考えてございます。

また観光交流の面で申しますと、さまざまな観光プロモーションの結果、天津からの団体旅行客につい

でも少しずつ進んできてございますし、また姉妹都市関係をベースにした客船の誘致活動の結果、シアトルに本社を置く客船会社のクルーズ船、これが2路線、神戸に誘致をするなど、実質的な成果も上げてきてございます。ただ、海外都市との交流を取り巻く環境については、最初の姉妹都市提携が50年前ということで考えますと、当時からは非常に大きく変化をしてきてございます。当時は、市民の方が海外に行く機会、非常に限定をされていた。それから、グローバル化が非常に最近に進んでまいりまして、ひと昔前と比べましても、海外旅行が非常に身近に行けるようになった。さらには、地域国際化が進行するということで、地域の中に外国人の方も……

102：○主査（芦田賀津美）

○主査（芦田賀津美） ご答弁は簡明にお願いいたします。

103：○上田国際文化観光局国際推進室長

○上田国際文化観光局国際推進室長 はい。

また、IT化とかが非常に進んできてございます。そうした中で、これまでも行ってきました友好親善交流の継続とともに、企業誘致あるいは観光客誘致に役立つような相互利益型の交流とか、あるいは実際の環境問題等を抱えております課題の解決に資する課題解決型の交流とか、そうしたことを、今後、交流の柱にして進んでいきたいと考えてございます。

以上でございます。

104：○分科員（北山順一）

○分科員（北山順一） 今のルミナリエについて再質問したいと思いますが、今、局長は、このルミナリエの時期は、閑散期でいい時期で、神戸の経済の活性化には非常にいいよと、こういうふうなことでもございましたけれども、12月6日から12月17日が閑散期ですか、そんなはずがありませんので、これはちょっと1回考え直してもらいたいと思います。例えば、北海道の札幌の雪祭りが、2月5日から2月11日、7日間やるんです、観光客215万9,000人来るそうです。経済効果は315億円だと、こういうふうに公表されておるわけでもございますけれども。神戸のルミナリエは、12日間やって404万人来ております。経済効果は幾らですかいうたら340億円だと、こう言っておりますけれども、これで本当にいいんだろうかということをもう1回考えてもらって、あしたそういう会議が開かれるんだと、こういうことですけれども、もう1回じっくりと考え直す必要があるのではないかと私は思っておりますので、十分考え直してもらえる機会には考えていただきたい。

そもそもルミナリエ、それ以外はないんだと、こういうことやけど、ルミナリエという名前はもうこれしかないんでしょうけれども、よそ行ったらいっぱいあるでしょう、ミレナリオとか何とか変な名前のやつようけあります。だから、イタリアのこういうやつもたくさんあるんで、これがなかったらもうできないんだということにはならないと思いますから、そのこのところはもう1回考え直していただいてご答弁いただきたいと思います。

それから、文化賞についてお伺いいたしますけれども、確かに神戸市の文化賞というのは、非常に格調の

高いものであって大変評価が高いんです。兵庫県の功労賞をもらっておるけれども、神戸市はもらえないというような人いっぱいおるんですよ。さすが神戸市や、兵庫県よりはるかに格調が高いんだと、こういうふうに私たちは思っておるんです。そういう意味で、選考については、例えば、その年その年によって今まで申し出てこなかったような分野の人たちが来るでしょう。そういう新しい分野の人の推薦があったような年には、その分野の人を選考委員に入れるとか、そういうふうな工夫をしてもらわないと、その分野のことをわからない人が選考をしておいて、イエスだ、ノーだと言ってもらったら困ると、私はそう思っておりますので、一応、その点、再度お伺いいたしたいと思います。

姉妹都市については、なかなか成果が見えにくいというのも事実ですから、その成果が見えるようにひとつ頑張っていたきたい、これ要望で結構です。

2点お願いします。

105：○主査（芦田賀津美）

○主査（芦田賀津美） 大森局長、答弁は簡明をお願いします。

106：○大森国際文化観光局長・観光監

○大森国際文化観光局長・観光監 ルミナリエ、閑散期と申し上げましたのは、一般的な観光の閑散期という意味で、冬場はどうしても観光客が少ないということでございまして、都心には確かに商業施設ございますのでたくさん参ってございます。そういった意味で閑散期と申し上げました。ちょっと言葉足らずで申しわけございません。

また、ルミナリエにつきましては、神戸ルミナリエがこれだけ多くの方に支持されてる理由の1つが本場のものだと思っております、そういった確かに名前もほかのものもございまして、今のルミナリエが非常に支持されているのではないかとということで、どうしてもこのイタリアの作品に若干こだわってるといってございまして。

それと、文化賞……（「僕はルートを言うてる……」の声あり）

107：○大森国際文化観光局長・観光監

○大森国際文化観光局長・観光監 場所につきましては、確かにいろんな検討をさせていただいております。来場者の輸送とか、どうしても広場とか、来場者のたまり場とか、会場周辺の波及効果、そういったものを検討しながら、どうしても今のようないい形ではないかなというふうに、私ども今の段階では考えてございます。

それと、文化賞の人選でございますが、どうしても私ども文化賞を例年50から70ほどの推薦をいただいております、これ自薦、他薦も含めて。しかも、分野もさまざまでございます。一例として、文学にしましても、詩とか、俳句とか、短歌とか、たくさんの分野がございまして。ただ、他都市におきましては、こういった推薦書の記載内容を補完するために、候補者の業績や活動実績について、その分野に精通した方に事務局から事前に問い合わせをし、コメントをいただいた上に選考委員会にかけるといったところもございまして、私ども、こういった形で、神戸市におきましても、選考委員以外の芸術の文化関係者な

どから、候補者の業績や神戸市での活動実績について、専門的立場からコメントをいただくようなことも考えて、より客観的に評価につなげていくようなことも検討してまいりたいと考えてございます。

以上でございます。

108：○分科員（北山順一）

○分科員（北山順一） 委員長，答弁は了解しました。

ただ、さあ、こっち行ってください、こっちに立ちどまらないでください、横から入らないでくださいというずっとついて行ったら三宮駅へ着いてしまうという、これはあきませんで。それからまたこっち行ってください、あなたの道はこっちですって行ったらバスの駐車場だったというのまあかんと思います。もっと考えていただきますようお願いします。